# とのさん

おばおさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とのさん

【Ｎコード】
Ｎ７９２２Ｆ

【作者名】
おばおさ

【あらすじ】
私の通う西高校にある男の子がいる。あだ名はとのさん。どこにでもいる普通の男の子。そんで私の仲間。そやなあ…。ずっとそうであり続けたらいいのに…ーずっとそうであり続けたかったよ。なあ．とのさん

**この時まだ知らなかったね**

とのさんが死んで2ヶ月がたった。
学校でとのさんの話は全く出てこなくなった。
それで私は不安になる。
一体．どれくらいの人の中にとのさんは居るのだろう…

／

私がこの西高校に入学したのは２００８年の４月９日。
『絶対に無理だ！』と塾の先生に強く言われ．『レベルをもう少し下げたほうが…』と学校の先生から控えめな感じで言われた２００７年の１２月。

そこから死に物狂いで勉強し始めた。

そのかいあってか．
入試の日が誕生日だったからか．
なんとか合格することが出来た。

『なあなあなあ！！まっち！まっち！まちち！クラブ何入るん！？？』
中学からの友達．なおちゃん　が聞いてきた。

気づけば4月も終わろうとしていた。

『あ．忘れてた。仮入部今日までやな～ーー…ってことは今日クラブ何にするか決めなあかんって事か！！』

『そーゆーことや。この3日間でどのクラブ行ってみた？』

『えーと．．．美術部は絶対入るって決めてるし初日に行った。昨日は放送部行ってみた。放送楽しそうやったし兼部しよっかな～～』

私は美大に進みたいと考えているため美術部に入るのは絶対条件だった。
放送部は全国大会に進むぐらい実力のあるものだった。
そして先輩曰わく．全国に進む事が出来たらタダで東京に行けるそうだ。

『ちょっちょっと待った！　！　まっち演劇部行ってみいひん？？』

『えっ！！？』
なおちゃんって演技とかするようなキャラじゃないから意外だった。

私も演劇には少し興味がある。

『うん！行ってみよかっ！』

そうして私となおちゃんは演劇部の活動場所に向かった。
まだ少し肌寒い・
あの日のような気候だった

**後ろ姿だけ見えた**

演劇部の活動場所についた。

化学準備室…
本当にここだろうか??
中は締め切られていて見えない。
ただ電気がついているのはわかった。

なおちゃんと私は顔を見合わせた。

中3の時なら間違えて入っても
「ごめんっさいっ」と言えばそれで良かった。
だが今は1年という後輩の立場だ…
…
ま、いっか。
今回も
「ごめんっさいっ」で済ませばいい。

私は勢いよく扉を開けた。

先生がいっぱいいた

私は無言のまま扉を閉めた。
心臓がバクバクいっていた。

演劇部の活動場所はその隣だった。

『おぉおおー来た来た仮入部員っ！！ようこそ演劇部へ！！！』

扉を開けた瞬間．テンションの高い先輩方が今にも飛びついてきそうな勢いでこっちにやって来た。

その中で唯一冷静そうな先輩が

『今な前に大会でやった劇．披露しようとしてたところなんよ。良かったら見に来て』

と言ったので私達は是非！！ということになった。

椅子に座ると周りにも数名一年生らしき人がいた。

私と同じ一年四組の子もいた。でも話したことも無かったからお互い目を合わせない様にしていた。

あれ？珍しいな。男の子だ……

丁度私の斜め前に男の子が座っていた。こちらから顔は見えない。

ただでさえこの高校は男の子が少ない。だから．女子ばっかりで孤立するという理由で文化系のクラブに男子が入る事はまず無い。

演劇に興味あるんかなー。
無口そうやなー。

男の子はノートに何か書いている様だった。

何かいてるんやろ？聞いて見よっかなー。

それがとのさんとの最初の出逢いだった。

私の中でのとのさんの第一印象は
無口そうやなー。
だった。

## あ．あの子やん

結局私は
「タダで東京に行ける」という放送部の甘い誘惑に負けた。

演劇部の演劇は想像以上に凄かった。そんでなおちゃんは非常に感動したらしく．私に
「一緒に入部しよう」と3分に一回言ってきた。

が．東京には勝てなかった。
なおちゃん．すまん。

そんなこんなであっという間に夏休みが過ぎた。
放送部と美術部にはだいぶ慣れてきた。そして夏休み後．生徒をいじめるテストを終えた私達は一年で一番盛り上がる行事を目前としていた。

我が西高校伝統行事．菱代祭（文化祭の事）だ。
…と言っても模擬店があるわけでなくクラスで劇をするわけだが。

それでもどのクラスも燃えていた。

私のクラス・１年４組を除いては。

『うちらのクラスさあー…何の劇すんの??』

ワンテンポおせーよ!!!

他のクラスもう台本出来とるわ!!

『えーこんな劇すんのお??私嫌やあー（＜＞）』

うるせーブリっ仔!!それやったら最初っから意見出せ!!!

とまあこんな感じだ。

そんで別にクラスがまとまることなく迎えた本番。

私のクラスはアラジンの劇をした。

全く息の合わない役者たちのぎこちなさが逆にウケたらしい・　会

場は笑いでいっぱいになった。

ま．これはこれで成功と言っていいか。

続いて2年生3年生と劇があった。
2年1組の戦争の劇に関しては私は泣きそうになった。

そしていよいよ最後の劇となった。
それは演劇部によるものだった。

2人の女の子が登場し．物語が始まる。
人を探して道を歩く2人はゴミ袋の後ろに隠れている男の子を発見する。

そん時はボケーッと見てた。
後で気づいた。

あ！！前のあの男の子や！！
やっぱり演劇部入ったんかー。

しかしあの男の子演技うまかったなあ…

来年はどんな演劇部の劇見れるやろ？

楽しみやわ。

**いたんだ…**

菱代祭を終え．私達はまた普通の日々を過ごしていた。

『あ．りかちゃん！！あやね！！次英語や！！教室遠いし早く行こ。』

りかちゃんとは放送部仲間だ。
演劇部と兼部している。
仮入部の時にお互い目が合わないようにしていた．あの子だ。

あやねは同じ中学だったが高校に入学してから仲良くなった。今一番親しい人と言えるだろう。

『ちょい待って．辞書取ってくる～。』

『早よしろあやね』

『ごめん．はるちゃん。私も取ってくる～』

『いいよいいよりかちゃん。ゆっくりでいいからな～』

私は人によってかなり性格が違う。
人によってSになったりMになったりする。

まあそんなのどうでもいい。楽しけりゃ。

英語の教室に着いた。
もう結構人が来ていた。
でもやっぱり幾つかのグループになって喋っている。

この英語のクラスは3組と4組合同のクラスだ。
だから私も3組の子といまだ少しも話せず．いつも4組の子と固まって喋っている。
そして同じクラスなのに．まだ3組の子の名前が覚えきれていない。

そんな中．席替えをすることになった。

私は完全なド真ん中の席になった。

授業中寝れへんやん……

あやねは仲のいい男子と隣同士になれたらしく．後ろから甲高い笑い声が聞こえてきた。

いいの～あやねちゃんは～

まあ私の隣にも男子はいるけど．　喋ったことも無いし…

!??!?!?!

あの男の子だ!!!!

え??ってことは…

このクラスで今までずっと一緒だっんだ…

ごめんよ。6ヶ月一緒にいてて気づかなかった…

私も影薄いけど…

うん。影薄仲間だ。

なんか．ごめんよ…

その授業中私は一人謝罪に尽くしていた。

その男の子はホーリーと呼ばれていた。私もそう呼んでいた。

私がホーリーを　とのさん　と呼ぶようになるのは．もう少し先のことである。

## ホーリーが来た

ホーリーの本名は堀池といった。だからホーリー。

このあだ名は英語の先生が決めた。

その英語の先生はくみちゃんという。

お笑い芸人が大好きで，小テストは，惚れてまうやろーーーテスト，とかいつも変な題名がつく。（お笑い知らない人ごめんなさい）

そんなんで英語は楽しい。

くみちゃんの一人劇は特に面白い。

隣を見たら，声を出さすに二ヤッと笑うホーリーの横顔があった。

意外だった。無口だと思い込んでいたホーリーはよく笑い，突然当てられたりしたら慌てふためいてみんなを笑わせた。

その時は別に私達は接点が無かったから何とも思わずにいた。

私からホーリーに話しかけることも無かったし，ホーリーから私に

話しかけることも無かった。

そして西高校はあと3日で秋休みを迎えようとしていた。

その日もいつも通り昼の放送をしながら放送室で昼食をとっていた。

すると誰かが放送室をノックした。先輩がドアを開ける。

『あの…放送部見学させてもらっていいですか??』

ぼそぼそと喋るのが後ろから聞こえた。

『ああ～どうぞどうぞ！』

先輩のテンションが上がるのを感じた。

なんせうちの放送部は先輩2人と一年4人というかなりの少人数だから。

一人でも入ってくれたら大いに助かる。

私は振り返りもせず．ともに放送部と美術部を掛け持ちしてるまこ

ちゃんとペチャクチャ喋っていた。

『え～と・・・お名前何て言うの？？』

『堀池です。』

ん　？

『あっホーリーやん！！』

私は思わず立ち上がった。

『あ・』

ホーリーも私に気づいた。

それを見ていた先輩が．
『あ．２人とも知り合い？じゃあ松本さん（私の事）堀池くんに機械紹介してあげてー』
と言ったので．私は初めてホーリーと話すことになった。

私はどう話せばいいか分からず．放送の機械の説明をひたすら喋り続けた。
今思えば．きっとホーリーは（いきなり説明されても分からんわ）と．正直つまらなかっただろう。
それでも彼は私の話をウンウンと聞いてくれたので．私は調子に乗ってペラペラペラペラ喋り続けていた。

その後ホーリーは先輩から放送部の色んなことを聞かされていた。
『全国いったらタダで東京行けますよ。』
そんな先輩の甘い誘惑の声が聞こえた。

## ホーリーが入った

秋休みまで後一日になった。

最近放送部ばっかり行ってたしな～
今日は美術部行くか。

そう思って私はあやねと一緒に美術部に来た。

『ちわわわわーす』

『あ．あやねとはるちゃんや～
ちわわわわーす』

美術部一年はこの挨拶が基本である。

荷物を置いて椅子に座ったけど…さて何もやることが無い。
とりあえず喋ることにした。

すると美術の先生がゆっくりと教室に入って来て．『お前ら．喋ってるんやったら絵ぇ描けよ。』
と言ってまたゆっくり出ていった。

美術部員はゆっくり出て行く先生をゆっくり眺めながらまたワッと喋り始めた。

そんで私とあやねが‘ざわわ音頭’を極めていると．まこちゃんと美部仲間が喋っているのが耳に入ってきた。

『なんか小説書いてはんねんやろー』

『そやねん。それがめっちゃヤバいねんて。文章力凄いらしい。だから倫理の先生がすごい堀池くんに興味もったはるねんて。』

ざわわーざわわーざわわー

『ーってお前らさっきから何やってんねん！！』

まこちゃんと美部仲間がその話を中断して突っ込んできた。

あやねと私はいやああ～とテレながら．

『ざわわ音頭．一緒にやる？』

と言った。

話を聞いててわかった。

倫理の先生は二ノ宮先生と言って．うちの放送部の顧問だ。きっとホーリーが放送部の見学に来たのも二ノ宮先生が勧誘したのだろう。

そして演劇の仮入部の時にノートに書いていたものは小説かネタ帳か何かだろう。

『小説家になりたいねんてー堀池くん。』

美部仲間が言った。

そっかー。
ちゃんと夢持ったはんねんな。

ざわわ音頭をしながら私は思っていた。

うちも漫画家なりたいっていう夢．あんねんけどなあ…

なーんかズルズル引きずって．全然前に進めてない。

よし！！今日漫画描いてみよう。

秋休みに入った。

私はダラダラ生活を過ごし．それでも漫画だけは描くようにしていた。

そんな日が続き．一週間しかない秋休みはあっと言う間に終わった。

今日もいつものように昼の放送が始まる。

私が急いでお昼ご飯を食べていると．

ドアがガラッと開いてホーリーが転びそうになりながら入ってきた。

『あの…！！今日から入部します！堀池です！！』

『おおおおおー！！』そこにいた全員がヤッターと言った。

放送部に期待の新人現る！

そんな言葉が脳裏に浮かんだ。

『小説家なりたいねんてー』

なあとのさん。

何であんたは…

大事すぎる夢を持って…

消えてしまったの？

**おいでとのさん！**

次の日の英語の時間。

いつものようにあやねの甲高い笑い声が後ろから聞こえてくる。

そんなあやねにいつもなら

『うっさい。』

『笑うな。』

と言うのだが今日は違う。

私はホーリーの机をコンコンと叩いた。

『なあホーリー。』

ホーリーが横を向いた。『あ．松本さん。あの俺．今日から昼の放送頑張ります。』

…なぜ敬語？

まあいいや。

『うんっ頑張って！あー．えっ～とホーリーってな．放送部でどっちの担当やりたい？

あっ．何かいちお声するか機械するか一人一人決まってんねん。』

『あ～俺・どっちかっていうと声やりたいねん』

んっ！？なんやタメなりおった。

『へ～そうなんや。なんか男の子やし・機械やと思った。』

『あ～いや・俺・ちょっと俳優とか声優とか興味あって…』

ホーリーは淡々と話した。

自分のやりたいこととか・興味あることとか・あるのがちょっと羨ましかった。

『へー！俳優かあ～。』

私は身を乗り出して言った。

その時

『はーいっ！！みんなここちゃんと聞いとかなあかんでーー！』

くみちゃんのでっかい声が教室に響き渡る。

ホーリーが前に向き直ろうとした。

私は何故か慌てて.

『あっホーリー！』

『？』

ホーリーもその声に思わず横を見た。

何やってんねん私。なんも言うこと無いのに…

『あー…えっと…うちら．そういえば……

何言うの私。

ずっと隣に居てんな。』

…それかよ。

私が床を見つめたまま思考停止しているとホーリーが『ほんまやな』

って笑った。

だから私も嬉しくなって笑った。

／

キーンコーンカーン…

お昼だ！！

４時間目終了後．私はお弁当箱とペットボトルを持って教室を素早く出た。

放送室に直行して勢いよくドアを開ける。

『こんにちはー！！』

『松本さんこんにちはー。』

機械の前に先輩がいた。

机ではまこちゃんとりかちゃん．そしてホーリーがお昼ご飯を食べていた。

りかちゃんが可愛らしく両手でパンをかじりながら言った。

『はるちゃん。今日とのに機械やらしてあげていい？』

『うん！いいでー…』

…あれ？とのって誰？との…殿？

『え？とのって…』

『あっ演劇部ではとのって呼んでんねん。』

そっか。演劇部一緒やもんな。
そういや昨日もとのって呼んだはったな。

『それでな．はるちゃん。とのに機械教えながらついてあげて欲しいねん。』

りかちゃんが小さくなったパンを一口で食べて言った。その隣でホーリー．いやとのが上目使いでこちらを見てくる。

『よっしゃ任せとけ！うちが見たる。とのさんおいで！』
私がそう言うと．とのさんはお弁当箱を持って慌てて付いてきた。

先輩が『さん付けすんの？』と言ってクスクス笑う。

『じゃあとのさんはこっち座って！』

私はもう一つパイプ椅子を引っ張り出してきてとのさんを座らせた。

『今からやるから見といてね。』

とのさんがコクリと頷いた。

『まこちゃんいけるー？？今から放送入りまーす。』

私はマイクのボリュームを上げ．まこちゃんにサインを出した。

**ブフフっ**

『ＮＢＣ１０月３日金曜日．この放送は西校放送部がお送りします…』

まこちゃんが喋り終わると私はＭＤを再生させて椅子に腰掛けた。

そして無言で私の行動を見ているとのさんに言った。

『これが機械のやること。初めはめっちゃ緊張するけど簡単なもんやで。』

『う…うっうん！』とのさんが半分笑いながら返事をした。

わかっとらんな…。

とのさんはそんな私の心境を察知したらしくまた無言になった。

『さっ座ろ座ろ。早よお昼ご飯食べな時間無いでー！』

お昼ご飯中．私は無言になったとのさんによくわからん質問をしまくった。

とのさんはようやく無言ワールドから抜け出して二ヤッと笑った。

それから私のどうでもいい質問に全て答えてくれた。とのさんとこんなに喋ったのは初めてだ。

５時間目は英語だったので私達はそのまま一緒に教室まで向かった。

その時の会話はまるで覚えていない。

ただ私は嬉しかったのを覚えている。

中学の時私は女子テニス部で、こういう男子と部活を共に頑張るってのが無かった。
その前に男友達もあんまりいなかった私にとってそれは凄く嬉しいものだった。
ああ。とのさんは私のことそう思ってくれてるかな？

二ヤッっと笑う横顔を見ながら私は妙にワクワクしていた。
／
英語の教室についた。
ドアを開けると3組の男子がいてこっちを見てくる。
それでお互い黙り込んじゃって、そのまま自分の席に着いた。

そしたらとのさんの周りに男子が集まって
『ホーリー！今日の放送お前がやんのかと思ってたやんけ～』とか言う。

とのさんはニヤニヤして『今日は機械やったねん。』って返した。
ちょっとしてからあやね達が来たから私はみんなとベラベラ喋っていた。

それからちょっとして『おぉーらああ！お前ら席に着け着けぇ！』と、くみちゃんが必要以上に腕を振って入って来たからお喋りは一時中断となった。

私が席に着いたその時。くみちゃんの腕がピタリと止まって『おびょびょうおー～？！ホーリー！！』と気持ち悪い声を出した。

私はその声にビックリして勢いよくとのさんの方を見た。

あ。とのさん。
まだ食べれてなかったんだね…

とのさんは英語の授業が始まっていることに気づかなかったらしく、一生懸命お弁当を口に詰めていた。

その慌てっぷりに笑いをこらえきれず、私はブフフっと気持ち悪い笑い方をしてしまった。

その『ブフフっ』は予想以上に教室内に響いた。

とのさんのあほー！何かこっちが恥ずかしいやんけっ

そんな私の小さな怒りに気づくことなくとのさんは必死に口をモグモグさせていた。

／

月曜日。
昼放送が終わると、りかちゃんがみんなを集めて言った。『えーとっ！もうすぐ体育祭があります！私達放送部は司会と応援をするので今日その台本を持ってきました！』

『はあああいっ！』放送部員は元気よく返事をした。

いよいよ体育祭かあ～…何も楽しみちゃうわ。

運動が嫌いな私はひそかにそう思っていた。

体育祭まであと１０日だ。

## 何でなんやろ？

まただ…またこの４組ってクラスは…

体育祭の大縄飛びの練習中．私は呆れていた。

他のクラスは

代表）『みんな行くよ～！』

クラス４０人全員）『はーい！いっせーのーでっ！！』

と言ってみんな息ぴったりで飛んでいる。

４組は…

誰か１）『もう飛ぶよ～はーい．いっせーのーでっ！』

誰か２）『ちょっ！こっちつめすぎやって！もうちょっと向こう行って！！』

誰か３）『こっちも無理やしな。ほんま人のこと考えろって！』

誰か１）『行くよ～』

誰か４）『ってかこの縄短すぎちゃう？』

誰か１）『…もう知らん。』

誰か１…お疲れ様でした。

１５分間．私達が飛べた回数は合計たった２回だった。

大丈夫かこのクラス！！

周りは２０回以上飛んでいるのに…

そんな事を思っていたら私の頬に大縄が飛んできた。

そのまま私は大縄にビンタされ吹っ飛んだ。

『痛ったいねんコラァ！』

私はあまりの痛さに思わず怒鳴ってしまい近くにいたあやねらが引いてしまった。

あかんこの空気…。そして何を思ったか私は『ぶっ・ぶったね…父さんにもぶたれたことないのに！！』と大縄に向かって言った。

すると…予想以上にみんなが笑ってくれた！

まぬがれた…

正直これはひどいと思っていたからホッとした。

その次の瞬間・今度は足首をビンタされた。

だから・父さんにもぶたれたことないねんって！！

もうやめてや！！

縄が短い上に縄を回す奴がやる気を喪失しているため・その後も大縄は私を激しくビンタし続けた。

／

体育祭前日の放課後。私達放送部は運動上にいた。

『コードこっち持ってきてー！』

先輩の指示に従い私達はせかせか動いた。

そしてやっと司会席の準備が整ってそのまま司会のリハーサルをす

ることになった。

とのさんがドキドキしながら原稿を読む。

『ご町内の皆さん。こちら西高校です！只今明日の体育祭のリハーサルをしています…』

結構ええ声しとんな…

ぼけーっとその様子を見ていると、

『なーなーはるちゃん！』

後ろからまこちゃんが声をかける。

『何ー？』

『原稿の読み連しよー。』

『おっけ～』

私達はテントの下にある長いすに座った。

そしてしばらく読み練習をした。

『只今よりぃーー！！西高校伝統ぉー体育祭を始めるんでぇーーよろしくぅ！』

２人ともすぐに飽きて原稿をヤンキー風やブリっ子風にして読み出した。

あはははーー！！じゃあ次サラリーマン風に読んで～

その後先輩に引っ張り出されたのは言うまでもない。

明日はいよいよ待ちに待っていない体育祭だ。

／

『只今より！西高校最後の体育祭を始めます！』

わあああぁ！！！

うわっ！凄い盛り上がり！！

予想以上でびっくりした。

緊張するな…こんな中で全校の応援すんのか…

初めは1年の全員リレーだから先輩にまかせた。

そして2年の全員リレー。私が応援を任された。

『どの色も頑張って下さいっ！』

『あー赤組頑張って下さい。』

『赤組が黄組を抜かしましたー』

…

何というありきたりな応援。

先輩　苦笑。

その後の応援も見事にぐだぐだであった。

りかちゃんが聞いてくる。

『実況の松本さーん！今の騎馬戦の結果はどうでしたか～？』

…

『え～…すいません。わかりませんでした。』

…

『あ…はい。ありがとうございました～』

…

しゃあないやん！！

あんなに人がもみくちゃになってたらどっちが勝ったかなんて分かるかーー！

叫びたいけどやめといた。

結局。

大縄は最下位だし

応援は死んでるし
トイレのドアに指挟まって指パンパンなるし
体育祭終わった後に泥まみれなるし

何もいいことねぇ！
ふらつきながら制服に着替える為に放送室に行った。
階段を上ると放送室の前にとのさんがいた。
ありゃ。りかちゃんらが着替えてるから追い出されたんか…
そういや今日はとのさんと結構話したな。
綱引き一緒に行ったし。
にこっと笑ったらとのさんも笑った。
『あ．松本。あんな…』
なんや？前までさん付けやったのに…
『何？』
『杉（りかちゃん）にな伝えて欲しいことが…』

／

すいません。この後の会話が思い出せません。

でもなぜか

この時のとのさんを私はとても切なく感じました。

何でなんやろ？

今でもあの時のとのさんが頭から離れません。

とのさんが死んで昨日で丁度３ヶ月でした。

**好きなのか？**

機械の前に2人で座って昼ごはんを食べた。

『とのさんってな～教室でごはん食べてるとき．うちらの放送聞こえてる？』

『聞こえてんで～。』

『そう。よかった。最近機械調子悪いから。』

『ってかうち食べんのめっちゃ遅いねんか～…お！？今日うちのほうが早いやん！！よかったわ～食べんの遅い人いて。』とのさんはいつものようにニヤッとする。

その横顔が愛らしいような気がした。

やばいな私。とのさんとはすごく喋りやすい。

それでなんか…

なんか…

何なんや？

愛おしい？

何ゆうてんねん私……。私はとのさんより半年早く入部したからっ

て先輩気取ってる。
とのさんはそんな私に笑顔で接してくれる。
細い目が無くなっちゃうぐらい笑ってくれる。
私は嬉しくなる。あ～今日の放送とのさん来てるかな？なんて思う。
会いたい？

別に顔が赤くなったりするわけでもなく私は冷静に考えていた。
ただとのさんの側に居られることが単純に嬉しいからだと思う。
この時私は忘れていた。体育祭の後・私はとのさんのアドをゲットしていた。なのにとのさんにまだメール出来ていなかった。
そんな事すっかり・本当にすっかり忘れてた。

昼休み終了のチャイムが鳴った。
ガラス越しでまこちゃん達が立ち上がっている。
『次美術やあ～！』そういって私も立ち上がった。
結局私より早く食べ終わっていたとのさんは余裕そうに音楽の準備をしていた。
『あれ？とのさん音楽なんや～』
うちの高校は芸術科目を美術・音楽・書道の３つから選ぶことが出来る。

『うん。そやで～』
放送室を出ながらとのさんが言った。
『じゃあ、とのと私音楽やしゴメンやけどはるちゃん鍵閉めといてくれる？』
りかちゃんが言った。
『あ～音楽室５階やもんな。わかった』
とのさんとりかちゃんは階段を上って行った。
とのさんは申し訳なさそうに“ありがとう”と言った。
―なんとなくだけど、好きなのかな。
私。とのさんを。
不意にそうおもったけどそれ以上は何も思わなかった。

／

その日の放課後。
『あのさ―！体育祭も終わったしみんなで打ち上げでも行かへん？？』
珍しくりかちゃん、まこちゃん、とのさん、先輩、私と部活に来た人が多かったから私はそう持ち掛けてみた。
『おぉ～いいねぇ。行こうや！』

まこちゃんが乗ってくれる。りかちゃん．そしてとのさんも頷いた。

『よし！やろう！…え～と…何する？カラオケとか？』

うん！私いい案出してる～

『あ．あたし人前で歌うの無理。』

うおぉぉぉ！！りかちゃんそう来たか！

『え～とじゃあ……ご飯食べに行くか。』

いいよもうありきたりで。

『うん！！！』

あ全員一致かいっ。

『でもさ～どこ行く？？』

『あ～そやなあ。みんな家バラバラやし…。あ”―地元やったら12時ぐらいまで遊べんのに～』

『うそっ！はるちゃんそんな深夜まで遊べんの！？いいな～』

『まあ家帰ったら．おかんに陶器で殴られるけどな。』

『いった～もうそれ完全暴力やん！！』

『あははそこまで本気ちゃうて』

あはははは―

…

『ばいば～～い』

結局何も決まらなかった。

りかちゃんはあれからすぐに帰った。まこちゃんととのさんと私は最終下校までいて今に至る。

『じゃあみんなで帰ろっか！』

まこちゃんが言った。

『あ～私チャリ通学だからみんなと反対方向やわ。』

あ～いいな～みんな電車通学で。

チャリ通学少ない（・ω・；）

『あ．はるちゃんそっか。じゃあとの．帰ろっか。』

『バイバーイ！』

私たちは手を振りながら反対方向に進みだした。

私はふいにとのさんを呼び止めた。
とのさんが私を見る。
『ちゃんと打ち上げ行きたいとこ考えといてや――！！』
私はそう叫んだ。
ちょっとだけまこちゃんが羨ましかった。

**光山よ**

『はるちゃん。』

朝のショートホームルームが終わった後りかちゃんが声をかけてきた。

『ん〜？何〜？』

私は机にへばりついていた顔を上げた。

『うわっ！めっちゃ眠そうな顔！』

りかちゃんの声のボリュームが上がったことから私は相当眠そうな顔をしていたようだ。

仕方がない。机に顔をへばりつかせて爆睡していたのだから。

『で．何？』

『はるちゃんあたしな…とのと打ち上げ行くのはちょっと……男の子とって何か抵抗あるし…それに…』

『それに？』

『とのって何か怖い。』

……

『演劇になったら人が変わるっていうか』

……

りかちゃんに何と言ったらいいかわからなかった。
雰囲気でりかちゃんはとのさんの事を好んでいないのに気づいてしまったから。

『そっか。』

私はそう言って再び机と一体となった。

それ以上は何も言わなかった。

／

…パクパク

…

会話ねぇ！！

昼放送の時間．担当に当たっていないまこちゃんと．とのさんと．先輩と．私は無言で昼ご飯を食べ続けた。

何か話題はないか……。するとふいに今日の朝に弟が言っていた話を思い出した。

私は今とのさんにその話題を言おうか言わないか迷っている。やばい。緊張してきた。

『とのさん。』

言った。

とのさんのお箸が止まった。

『？』

…

『こんにゃくゼリーでな。喉詰まらせて死んだ人って15人もいるんやって。

？？

でもな全部が全部マン〇ンライフのこんにゃくゼリーちゃうねん。その他のこんにゃくゼリーも含めて15人やねん。その内マン〇ンライフで死んだ人は2人やねんて。

？？？

そやのに私たちは全部マン〇ンライフのせいやと思ってるやろ？そんなんマン〇ンライフが可哀想やと思わへん？？

？？？？

そやし…とのさん。みんなにこんにゃくゼリーで死んだ人はマン〇ンライフのこんにゃくゼリーだけじゃないって広めといて。』

『って何の話やねん！！』

そうまこちゃんが突っ込んでくれたおかげで．本当に意味の分からない私の話をなんとか笑いに変えることが出来た。

『お…おぉ…わかった！広めとく！』

心優しいとのさんは私のよく分からない話にキチンと乗ってくれた。

『うわっもう昼休み終わる！！』

時計を見て私は思わずそう叫んだ。
だってまだブロッコリーを２つ食べただけだったから。

『はるちゃん……そんでとのも遅っ！！』

まこちゃんが突っ込む。すまんとのさん。私の下らなすぎる話に乗ってくれたばかりに！！

私ととのさんは必死に口をモグモグさせた。

／

家に帰って私は学校の予定表の紙が張ってある冷蔵庫まで直行した。

あ”ーーやっぱり――！！

家に帰る途中からふと思っていたのだがやっぱりそうだった。

私は直ぐにキッチンで人参を切っている母に言いに行った。

『お母さーーん！！あやかちゃんの結婚式の日ぃ学校ある―！！』

あやかちゃんとは私のおばさんにあたる人だ。いつもお姉ちゃんのように接してくれる。このたび結婚することになった。

母は人参を切るスピードを落とすことなく私の方をむいて

『うーそーやーろぉー　！？？あんたほんま間が悪いわ～。学校…

…休まなしゃあないな～』

と．早口に言った。

『まじで―！！あ～ほんま間が悪い。』

『あんたっ！』

『ん？』

『お鍋の中かき混ぜといて。』

『はいはい』

仕方なく私は学校を休むことにした。

まあ長年お世話になったあやかちゃんの晴れ舞台を休むわけには行かない。

１０月２５日。それが結婚式の日だ。
かなりの腕前のシェフが作る美味しい料理も出ると知り．私はその日がとても待ち遠しかった。

／

次の日の掃除時間。私はホウキを片付けてあやねとそのまま部活に行こうとした。
階段を降りようとしたその時だ
急に人が飛び出してきて
『やあ！松本！！』
と言った。
私たちは驚きのあまり固まる
そいつの正体は同じクラスの光山という男子だった。
『あのさ…　松本にお願いしたいことあるんやけど…』
『何ー？』
あやねは隣でニヤニヤ笑いながら私と光山を交互に見ている。
そんなあやねの反応を見もせず光山は話し始めた。
『俺前に生徒会に立候補したやんか。それで明日選挙やねん。だからクラスの男子全員に応援演説頼んでんけど……』

『けど―？』

『全員あかんかった。』

光山――――！！！あんた可哀想すぎるやろ！！１０人全員に断られたんか？！おとなしそうな子にも！！？

私とあやねは物凄く引きつった笑顔で光山を見た。

『…っやしお願い松本！！応援演説やって！！！』

え――――何でうちが……

―しかし私は断れなかった。

男子にも女子にも断られる光山があまりにも可哀想だと思ったから。

光山に無理やり原稿用紙を渡され、私は明日までに原稿を書き全校生徒の前で何の接点もない光山の応援演説をすることになった。

光山が笑顔で帰っていくのを見送りながらあやねが

『告白かと思った。』

とつぶやいた。

## いぴょをよろしくね（前書き）

だいぶお休みしてすいません

**いぴょをよろしくね**

緊張するな〜…

まっいいや！！今日のお昼は昨日コンビニで買った大好きなグラタンぱんやし（，、）！

私はコンビニの袋と紙パックのブドウジュース、そして原稿を持っていつものように放送室に行った。

「こんにちは―」

いつものように壊れる勢いでドアをあけ
いつものようにぐだぐだしてる部員に挨拶をする

私はとのさんの隣に座るため、いつもと違う椅子に座った。

「ん？」

とのさんがお弁当を見つめて硬直してる。

「お箸忘れた。」

…あちゃー

私も今日パンやしな〜

ってお弁当やったとしても恥ずかしくて貸せないだろ
と思った矢先まこちゃんが
「これ使い」
かわいい青色のお箸を差し出した。
とのさんはありがとうと言ってそのお箸で人参を口に…
ぎゃあああああ―！
私は叫んだ
「間接ちゅーやあああー！！！」
私はぎゃあぎゃあ言いながら騒ぎ立てる
するとまこちゃんが呆れたように、
「このお箸、昨日買ってきた新品や。何やねん間接チューて。」
と言ったので私はつまらなさげにふーんと言った。
とのさんは嬉しそうに先程食べ損ねた人参を箸で摘んでかじっていた。
くりぬかれたお花の形かわいいの人参だった。

私はそれを横目で見ながらグラタンぱんをかじった。

みんなが食べ終わった後、５時間目が始まるまで少し時間があったからお喋りタイムとなった。

「もーまこちゃん聞いて～！なんでよりにもよってうちなんやろ（＊´Д｀）＝３ほんま光山ってわからん人やわ―」

「…まあ頑張れ。あかん、それしか言えへん。」

「せやな。もう過ぎ去ったことは仕方ない！とりあえず頑張るわ！！」

私は勢い余って思いっきり机の裏を蹴ってしまった。

さっき飲み終えたブドウジュースが倒れてちょっとだけ中身がこぼれた。

「ブドウジュース――」

チャイムがなった。

みんなぞろぞろ出て行く

「あっ待ってブドウジュース！
ブドウジュースちゃう！！みんな待って！！」

「何してんのはるちゃーんドア閉めんぞー」

まこちゃんがゆっくりドアを閉めていく。

私はそこに無理やりカバンを突っ込んで脱出した。

「よっしゃセーフ！」

「はいっ！最後に来たし職員室に鍵返しに行きーや」

犬のキーホルダーのついた鍵をポイッと渡される。

鍵を閉めようとしたがなかなか閉まらない。

「閉まらん閉まらん英語の予習してへんのに！！」

完全にパニクってる私を見てみんなが助けてくれた。

「はるちゃんこれ逆向きやろ！！！」

「――……あはは？」

「はるかちゃーんもー」

みんなが呆れたように笑う

とのさんもそれを見て笑う

私も開き直って笑う

りかちゃんも

まこちゃんも

私も

とのさんも

笑ってた

／

「ヒューーー！！」

「たけし頑張れーーー！！」

「次は議長候補、２年２組、辻川　たけしくんの演説です」

パチパチパチパチ…

「オレがもし議長なったら何かします！！」

「お前ちゃんと考えとけや――！！」

わはははははは―

……

何やこれ！！！？

何？？この高校選挙するのに笑いとらなあかんの！！？？

原稿を握る手が湿ってきた。

いやっ

一年なんだし笑いなんかとる必要ねーよ

うん！真面目だ真面目にいこう！！！

心の中でずっと繰り返す

真面目に―

「次は会計候補1年４組、光山昌宏くんの応援演説を松本　はるかさんが行います」

―――やっぱやっぱ緊張……

椅子から立ち上がったら、もう立ってんのか浮いてんのかわからなくなった。

パチパチパチパチ…

全校生徒が無表情でこちらを見る

ただあやねだけがニヤニヤ笑ってた

――――よし！

「私は光山くんを応援します。彼はみんなの前に立ってリード出来る人です――――

始めてみると案外緊張しなかった。
ここまではかなり順調だった。
そして〆の部分、何を思ったか私はそこに書いてあった文章と違うことを言おうとした。

「皆さん！ぜひ！光山くんに　清き　清き

―いぴょをよろしくね

――――……？？？

いぴょ？

噛んだのだ

私は大事な〆を噛んだのだ。

しかし不備に思った全校生徒により幸いウケてくれた。
なんて優しい高校だろう

私は1人呆然として演説台に立っていた。

光山だけが無表情でじっとこちらを見ていた。

あやねの甲高い笑い声が体育館中に響き渡っていた

**ずっと仕舞っとくよ思い出**

私が死んだように元の席についたとき、とのさんが演説台に立った。

あっとのさんも応援演説か！

がんばれっ

そしてうちの様にミスれ。

そんな私のムチャクチャな願いをとのさんはあっさりとはねのけた。

とのさんがとのさんじゃないみたいに

「ぼくはノブくんをおすすめします！！ノブくんたまにグサッとくる言葉を僕に言いますが、根は優しい人です。

とのさんは何かが刺さったような痛そうな顔をした。

少し笑いがおきた。とのさんはさらにヒートアップする

―彼は心が大きい人です！！そう！！！この広い夜空の星たちのように私たち見守ってくれるでしょう！！！！

なんともいえないテンションの高さに歓声が沸き起こった！

彼が演劇部の一員であることを忘れていた。凄い演技力だ…

わたしは顔を膝にくっつけて大爆笑した

沸き起こる笑いの中、選挙はとのさんの凄い演技力で終わりを告げた。

マイクや演説台を片付けながらとのさんと話した。

「凄かったわ―とのさん。　やばいわあれ―　…それに比べてうちは……」

「いや～あれはあれでよかったよ。」

「う～はあ―放送部の恥やし―。」

「大丈夫」

「まあとにかくとのさん凄かったわ～

なんか…怖かった」

その時、とのさんは無表情になった。

そこから会話は途切れて私は放送室にコードを運びに行った。

そのとき私は前のりかちゃんの言葉がふと蘇って

ただなんとなく出た言葉だった

本当になんとなくだった

私は明日に迫った結婚式に胸を踊らせていて、何も考えてなかった

私の悪い癖だ　本当に

学校からかえると美容室に直行した。

結婚式では振り袖を着せてもらうから髪の毛をセットしてもらった

あやかちゃんが結婚かあ…

なんだか切なくなる

初めてしてもらった髪の毛のセット

髪が短い私は落ちてこないよう２０本ぐらいのピンをあっちこっちに刺された

みんなの視線を気にしながら自転車をこぎ

家に帰ってその姿を鏡の前で眺めた

母もまとまった髪の毛になって別の美容室から帰ってきた

いつもと違う感じに胸を踊らせ、その日はなかなか眠れなかった

# 無題

今年の3月、私は高校を卒業した。

とのさんが死んで3年。
命日のその日、私はあのホームへ行った。
確かにあったあの日にもう逃げないように。

笑顔で手を振れるように。

―

『はるちゃんはホーリーのことよく知ってるから…いわなあかんって思って…』

結婚式は無事終わって、私はおばあちゃんのうちで初めて着た振り袖を脱いでいた。

ウェディングドレス姿、綺麗だったな―

ぼーっとそんなことを考えながら普段着に着替え一段落していると、従兄弟らがまとわりついてくる。

この子達も疲れただろうしな、遊んでやるか！

私は馬になって従兄弟を背中に乗せた。

「こら！順番に乗って！重い重い！」

お姉ちゃんだって疲れてるんだよ！君たちが食べれなかったフォアグラは美味しかったけど！

そうして夕方４時頃まで弄ばれた。

本当に一段落したと思っていると、ケータイが光っているのに気付いた。

そういや今日は全然チェックしてなかったな、大事な連絡が入ってなければいいけど…

ケータイを開くと見慣れない画面に一瞬うっとなった。

着信がかなりの件数入っていた。
しかも親からでなくあやね一人だけから。

なんとなく心にひっかかった。
今日学校を休んだからその連絡だろうか。でもメールじゃなくて電話なんて珍しい。すぐにかけ直す。

2階から人がいない1階に足を進める。数回のコールであやねが電話に出た。

「あ―もしもしあやね？電話出れんくてごめん。なんやった？」

「……はるちゃん、今、どこにいる？まだ結婚式場にいる？」

「…？もう終わっておばあちゃんのうちやけど…」

なんで？なんでそんなこと聞くのだろう？
あやねの声は怯えているように震えている。

「…こんなおめでたい日にごめんなんやけど…はるちゃんはホーリーのことよく知ってるからいわなあかんって思って…」

あやねととのさんに何かあったんだろうか。
どうしよう。
助けなきゃ。

「あんな…、今日のお昼位にな。

堀池くんが電車に轢かれて亡くなってんかあ…」

話終えるとあやねは泣き出した。

泣きじゃくる声を遠くに聞き、
私は何故かごめん、と一言言って電話を切った。

しゃがみこんで口を押さえた。

目の前に鏡があった。

嘘だとわかってる、嘘に決まっているのに

私の顔はどうしてだか不安がっていた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7922f/

---

とのさん

2011年12月1日22時55分発行